

急ぎ過ぎだよ 人類は。
ゆるやかなネットワークを目指す

ITより
逢いてエ

雑報 縄文

いろんな考えがあるから面白い
いろんな人がいるから楽しい

No. 675

2024年3月 **9** 刊

編集・発行 鈴木厚正
〒266-0005 千葉県緑区菅田町2-21-359
T&F 043-291-2917

も・く・じ

- | | |
|-----------------|----|
| • 人口減少 | 2 |
| • 戸狩スキー | 5 |
| • 「種とあやす」琥珀の夏地 | 8 |
| • お便利心 | 12 |
| • おび急的 | 16 |
| • 山仕事(2月、大平・薄場) | 20 |
| • け・い・じ・ば・ん | 24 |



泉ゆきを「じはいつも山頭火」
(日本習字普及協会)

「〜24.3」の方は
会費をお願いします。
「24.3」の方は
5千円をお願いします。

月 日現在の
会員数 206名

この見本誌をみて新たに
「読んでみようか」という方は、
年会費 4,000円を
郵便局で 10540-52760981
(鈴木厚正の口座)
へ 振り込んで下さい。

題 字 故 佐村隆英和尚 (千葉県長柄町本光寺住職)
カ ッ ト 故 泉ゆきをさん (にっぽん箱絵の会会長)

印刷機 リソグラフ RZ 330

※この号の切手は春のグリーティング

山仕事(2月、大平・薄場)

今回、3泊4日の長丁場となった。

2月28日(水)、快晴。富士が美しい。前回(1月)から7週間ぶり。敷地駅で迎えてくれた正士、久米、若林、山本真由美さんの顔がなつかしい。

「豊岡と似たて元気村」で買物。青山さんの原木シヤケのパックに切手大のシールが貼られている。康江画伯が描いた青山さんの顔を、久米さんがパソコンでシールにしてくれたのだ。「もったいないから、高い方だけに使っている」と、宴席で青山さん。

この日の作業は茶園への油粕まき。竹中さんが散布機(本来は種子まき用)で油粕をまき、正士さんの耕耘機で原田さんと若林さんが交代でまいた後を撈拌する。残りは油粕の袋を運び、ぼくはもう、20kg入りの袋が重荷となったが、若い山本さんは軽々とかつく。山崎さんは所用で夕方に到着。

夕食は、お母さんと袴田克臣(かつみ)さんも参加。袴田さんから皆に「敷地の民俗」が贈られた。康江さんと久米さんが調えてくれた食事は、

人参と干しエビの洋風きんぴら、刺身(ビシヤウ、カツオ)、フコウリのゴマ和え、ナリ大根、エビ芋の煮物、金山舟みそ、白菜漬けと正士さんの手打ちそばと久米さんのだしをかきでいただく。

膝の具合が悪くうまく座れないぼくのために、岡田美智子さんが六角形のかわいい腰掛けを送ってくださった。ほかにも手きんつばなども。

この夜、正士さんがふらつく場面も。母屋に一人寝るため24時まで正士さんと一緒にいたので、離れの二階の寝室まで同行。



2月29日(木)、曇り。この日は森町薄場へ竹伐りに。薄場では竹中さんによる環境整備が進行中だ。ふだんは久米さんが手伝っているが、今回、竹やぶの整理を集中してやるうというもの。作業はほぼ半年ぶりの正士さんをはじめ、原田、山崎、若林、山本さんに初参加の伊藤みどりさんも。

竹やぶは竹中さんの家の裏側、崖の上にひろがっている。手分けして互いに障害とならぬよう取りかかる。原田さんとぼくは崖の上、屋根においかいさるように伸びた竹を整理する。無造作に伐ると屋根の上に倒れかかる。そうならないよう、ロープで竹を引っぱりながら伐る。

伐った竹は上の平坦なところで枝を払う。それで終りではない。竹中さんは、500mほど離れた休耕田をハス田にしようと考えている。ハスがイシに蒸らされぬよう、この竹で防護柵を造るつもりなのだ。技術者の竹中さん、必要な竹枝を計算し、太さ別に3種類の長さの竹の所用本数を計算して出してあった。伐った竹の太さをみて振り分け、切断した竹を場所に合わせていく。枝葉は、やがて肥料となるよう別の場所に堆積する。



竹を伐るときは、黄味を帯びた古いものから伐る。正士さんによると、7年ほど経つと竹

の子の出が悪くなるそうだ。また、あまりこみすぎてもよくない。昔から「1坪に1本」とか「傘をさして歩けるくらい」と言われている。

森工さんと久米さんが腕をふるった昼食を、久米さん宅でいただく。

みそ煮込みうどん、フキノトウの天ぷら、かまぼこ、稲荷ずし、菜の花とホタテのかしら和え、ワケギとイカのぬた、焼豆腐と自身魚の野菜あんかけ、切り干し大根と春雨の酢のもの。

17時、作業終了を待っていたように雨が落ちてきた。全員、車で浜松市の「あらたまの湯」へ。ここは珍しく、60歳以上は半額の360円に。ただし、年齢確認が必要。持っていない場合は、何度か頭を下げて許してもらった。

雨の中、正士さんたちに戻り夕食。予め用意された内容は、

寄せ鍋、ホタテカ、シラスと大根おろしに正士さんのおそば。正士さん、この夜も少しづつ、久米さんによると、そばを茹でるときもカが入らない様子だったという。

食後、伊藤みどりさんの自己紹介。画家で油、水彩、アクリル画もやり、

画家を二カ所併 みどりの森の美術館

ていいるとのこと。 静岡県浜松市中央区中野町860

TEL/053(540)0825

金・上・日・月 11時~17時



3月1日(金)、夜来の雨が上がり快晴。この日は、昨秋刈った草を集めて田んぼに散布する予定だった。しかし、雨で草はぬれ、前回は竹中さんの提案で草を積んだ軽トラックで田んぼにのり入れ散布したが、夕時、正士、原田さんと様子を見に行くと、ぬかるみでだめ。

話が前後したが、田んぼに行く途中、パラさん(神原幸雄さん)の家に立ちよる。森町の神原叔友さんが正士さんのために貴重な水と汲んで托されたポリタンクのからと、返すためだ。この日昼に来る水窪の菅さん、溝口久さんも、正士さんを気遣って度々訪ねてくれるのだ。

代わりに、近くの池谷(いけや)さんの竹やが整理を手伝うことにした。県道際の竹やがを、池谷さんが一人だけ伐るようしていたが、歩くのも覚束なくなった池谷さん、遅々として進まない。一昨日は、伐った竹が県道を半分ふさいでいるのを見た。とても無理とみて、正士さんが電話して手伝うことになったのだ。

二手にわかれてかかる。ここも、県道に面した崖の上、道路上に倒れぬようロープを使って慎重に伐る。

この間、水窪(みさくぼ)から守屋千鶴、熊谷道子、竹中礼子さんがご馳走持参で見えた。なかでも千鶴さんの家は、2月27日の夜から翌朝まで夜を徹して無う1300年続く国指定重要無形民俗文化財「西浦(にられ)田楽」の能頭を務める。祭りの前後はふときは多忙なのをいして来てくれたのだ。

また、山中圭子さんも久しぶりに浜松から山本真由美さんと伴われて見え、道路端から声援してくれた。小田原からは溝口久さんも、久さんは月に1、2回、見舞ってくれるという。

大勢で賑やかに昼食。水窪からのご馳走は、

餅三種(栲餅はクルミぬたご、草餅は黒豆の黄な粉ご、白餅は小豆あんご、夕かき餅の餅は、何とだっけ)、手作り豆腐、その豆腐作りから出たおからの炒り煮、ポテトサラダ、マカロニサラダ、とり団子汁(樽本風)、水窪ジャポタの煮ころがし、かみなりコンヤク、白菜漬物、たくさんに康江さんのトマトサラダ。

いものながら、材料からほとんどが手作りの山里のご馳走だ。

このすばらしい仲間たち。それが正士さんを支え、正士さんはまたほくたちに生き甲斐を与之てくれる。これが永く続いてくれることを願う。

ほくたちだけではない。正士さんの存在は近所の人たちにとっても欠かせないものとなっている。道路をはさんで さんは
数年前から脳梗塞。奥さんと施設に入ったが、その奥さんが最近亡くなり、空屋が続く。次に近い さんは、以前は茨松からここ(奥さんの実家)まで歩いてきたほどの健脚だったが、今はその面影もない 〰〰〰〰
ようなヨタヨタ歩き。 さんの隣り、養豚をしていた さんも 病気で人の気配がない。その三軒のまわりの草を正士さんが刈っている。

昼食後、茶園の耕転残りど、その後エレキを使っての地均し。これは短時間で終わって、
さんの竹やぶ整理の続き。心配だった県道際の竹はすべて整理した。

夕食は、お母さん、啓史さん、青山さんも一緒に。

餃子(山本さんから)、白菜と豚肉の炒め煮、フライド・ニンジン、ホウレンソウのゴマ和え、芽キャベツのコンソメ煮、おから煮(昼の)、ホタルイカの酢みそ和え。

それに、池谷さんから刺身の大皿盛り合わせ2枚と天ぷらなど揚げ物の大皿が届いた。刺身など立派なものだった。

食事の終り頃、正士さんが食器を拵ったまま居眠りを始めた。囲炉裏をはさんで向かい合うほくにはただの居ねむりにみえたが、隣りにいた又米さんが異変に気が付いた。大量の汗をかき、体温が低下しているという。呼びかけにもほとんど応えない。又米さんがかかりつけ医に電話をかけ続け、啓史さんとほくは母屋へ血圧計を探した。その血圧計はなつか使われていなかったらしく、役に立たない。

ようやく電話がつながると、低血糖だという。又米さんがブドウ糖を湯に溶かしてのませ、原田さんとほくは血糖値の測定器具とインスリンの注射器を探して再び母屋へ。その頃には正士さんも落ちついてきた。以前看護師をしていためぐちゃんも駆けつけ、血糖値を測る。低い。

正士さんの話すことから考えると、こんなことのようにだ。

昼にぬい餅など沢山食べ、血糖値が上がったが、インスリン注射をするのが遅れた。それから3〜4時間おきものように夕食前のインスリン注射をした。そのため血糖値が急速に低下した。そのあと食べたのは、血糖値が上がりにくい刺身などが主だった。その結果、人事不省に陥ったようだ。危いところだった。もしそのまま放置したら死に至ったろう。

同じ降がんだったおみさんにも、同じような場面があった。健常者は血糖値が乱高下しても、自律的に回復するようだが、膵臓の機能が低下するとそれができなくなる。困ったことに、当人は気がつきにくく、低血糖が進行する。

たしかに今回、正士さんはピンチだったが、これでダメになる訳ではない。正士さんによると、これまでも何度か同じような状況があったという。駐車場で倒れた時は、めぐちゃんが訪ねてきたときで争無きを得たという。しかし、認知症が進んだお母さんと二人きりのときは危い。これから先は、啓史さんとめぐちゃんが相談して善後策を考えることだろう。

正士さんにも気をつけてもらいたい。食品によって血糖値が上がり易いものとそうでないものがある。食品ごとに数値化したGI(グリセミック・インデクスだっけ)表がある。それ念頭に置いて食事をする必要があると思う。



猫の手

3月2日(土)、晴。正士さんは平常に戻った。昨秋、竹中さんと山崎さんが盛大に刈り込んだツツジの枝を、支障のないところに集める。

(春) スープカレー、水壺のご馳走の残り。

別れ際、お母さんが「はる帰るけえ、淋くなるよう」とくり返す。敷地駅で正士、ス米、竹中、若林さんに見送られ、帰途に就く。山崎さん、掛川駅で切符のご難。